

# 日本結核病学会北海道支部学会

## —— 第61回総会演説抄録 ——

平成23年2月26日 於 北海道大学医学部臨床大講堂（札幌市）

（第101回日本呼吸器学会北海道支部会  
と合同開催）  
第17回日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会北海道支部会

支部長 清水 哲雄（北海道社会保険病院健康管理センター）

### —— 一般演題 ——

#### 1. *M. avium* 症の治療中に *M. abscessus* への菌交代を起した1例

°鈴木洋祐・工藤和実・大塚満雄・黒沼幸治・北田順也・本間裕敏・北村康夫・成田欣史・高橋弘毅（札幌医科大第三内）

症例は75歳男性。*M. avium* 症に対しRFP, EB, CAM, LVFX内服で培養陰性が続いていたが、経過中に胸部X線、血液検査所見の悪化を認め、喀痰培養で *M. abscessus* が同定された。入院の上でRFP, CAM, AMK, IPM/CSに抗菌薬を変更し1カ月後には培養が陰性化した。*M. avium* 症の治療中に *M. abscessus* への菌交代を起した報告は少なく、文献的考察を加え報告する。

#### 2. AIDSに合併した超多剤耐性結核(XDR-TB)の1例

°網島 優・鎌田有珠・中山母衣・小倉滋明・山本宏司（NHO北海道医療センター呼吸器内）印部俊雄（同研究検査）

症例は40歳代男性。抗菌薬不応性肺炎のため前医入院しAIDSと診断されたがニューモシスチス肺炎治療中に結核合併が判明し当院転院となった。INH, RFP, EB, PZAで結核治療を開始したが改善を認めず、薬剤感受性検査で一次結核薬が耐性と判明しPZA, LVFX, EVM, CAM, THに変更したところ一時改善したがその後悪化。再検でLVFXが耐性と判明した。抗結核薬を変更したが効果が見られず永眠された。

#### 3. 気管支喘息治療に対するステロイド使用中に発症した肺結核症の1例

°黒須博之・藤部嘉美・佐々木真知子・林下晶子・伊藤健一郎・高村 圭・山本 真・吉川隆志（帯広厚生病第一内）

症例は平成18年に抗酸菌感染による偽腫瘍の手術歴がある60歳女性。起因菌は同定できなかったが、咳嗽以外

の症状や画像変化もなく経過を観ていた。21年に咳嗽増強し喘鳴も認め気管支喘息として治療するも改善なく入院。ステロイド投与により症状改善したが十二指腸憩室穿孔を生じ緊急手術となる。術後経過は良好であったが炎症所見持続し微熱も出現。画像上空洞性陰影の出現と術後癒痕像の増大があり、喀痰検査にて結核菌が認められた。

#### 4. 高齢者(70歳以上)肺結核患者死亡リスク要因の検討

°藤内 智・堂下和志・高橋政明・武田昭範・西垣 豊・藤田結花・山崎泰宏・藤兼俊明（NHO旭川医療センター呼吸器内）

高齢者肺結核患者の死亡退院リスク要因を明らかにするため、過去15年間に入院治療を行った70歳以上の肺結核患者738名について種々の臨床指標について解析を行った。男性、喀痰最大塗抹量、病変の拡がりが多い症例で死亡が多く、空洞の有無では予後に差を認めなかった。拡がり1, 2に対し3の症例では2.8倍の死亡リスクが認められた。死亡例では糖尿病、腎障害、脳血管障害を合併する例が有意に多かった。

#### 5. 潜在性結核感染症の発生届に関するWEBアンケート

°笹岡彰一・立花嘉浩（札幌立花病内）

医師限定インターネット・サイト（MedPeer: <https://medpeer.jp>）の協力により、リウマチ関連科医師を対象に「関節リウマチにおける生物学的治療薬と潜在性結核治療について」のタイトルでアンケート調査を行った。平成22年11月下旬から2週間で回答数は337件。うち発生届をして潜在性結核治療を行うが33件、届出せずに治療するが56件、潜在性結核の診断や治療を呼吸器科医等に任せるが134件であった。